

長岡地区と長岡石による採石関連遺構および構造物の調査報告

小林 基澄 (小山工業高等専門学校助教)
鮎澤 英佑 (小山工業高等専門学校建築学コース)

1. はじめに これまでの長岡地区と長岡石における遺構や構造物による町並み

栃木県宇都宮市市街地の環状線北部に位置する長岡地区では、かつて長岡石（ながおかいし）と呼ばれる石が産出した。長岡石は軽くて加工がしやすいことから、古くから塀や土留めといった土木材や、蔵や納屋などの建築材として使用されてきた。長岡石も、大谷石と同じく軟らかい石であり、耐火性能も高いため、建築物の他、竈等に加工されて出荷された。現在でもこうした石を使った建造物や生活用品に加え、長岡百穴や石切り場跡などの採石以降も含めた岩肌に刻まれている。街道沿いの石塀や石垣も含め、これらによる石の町並みが連続している。

本稿では長岡石とその産出地である長岡地区に対する採石関連の遺構や構造物等の調査の途中経過報告をおこなう。

2. 調査の概要

小山高専小林研究室ではこれまで、徳次郎石研究会と共に長岡地区及び長岡石についての調査報告をしてきた。昨年（2022年度）は、同地区について、石切場（跡）や石造建造物の実地調査を行い、採石時期や方法の確認、写真による記録、現地で採石を行っていた方へのヒアリング^{注1)}、既往の報告^{文1)}についての調査、石のサンプルの採取を行い、これをまとめ、報告^{文2)}、発表^{文3)}した。

今年度は長岡地区街道沿い及び周囲の傾斜や山沿いを範囲として、石切場（跡）の詳細、岩肌を利用した構築物（古墳、隊道等）、山道、土塁、石垣、石塀の分布や構成について実地調査を行っており、この途中経過について報告する。また、上河内民俗資料館に寄贈された採石関連の道具についても実測したため、これについても報告を行う。

3. 長岡地区と長岡石による採石関連遺構と構造物

調査範囲の石切場（跡）、岩肌を利用した構築物（古墳、隊道等）、山道、土塁、石垣、石塀、建造物を調査した結果を地図上に布置した（図1）。

地区内を東西に通る長岡街道の両側には、長岡石や大谷石を用いた建築物や構造物が連続している。まず、街道東側の山側には、長岡百穴や大谷石、長岡石を用いた石蔵が存在する。長岡百穴から山道を登ると、V字に切り込まれた石切り場跡がみられる。

続いて街道を西に進むと、石垣や石塀、土塁が街道山側に連続している。これらx fりはこの街道を整備しつつ、各敷地をフラットに調整したためだと考えられる。

街道中央部は、山側に石切り場兼長岡石の加工、積み下ろし場所や第二次世界大戦中の隊道がみられ、谷側（宇都宮環状線側）には土塁、石垣が連続する景観が残っている。このエリアはかつての採石の加工や運搬の要所であったと考えられ、当時の石工もこの周辺に住んでいた。谷川には細いあぜ道が現街道と並行して通り、この道は旧街道として使われていた。石垣や土塁もこの道を確保するために地造られたとみられる。現在は植栽や庭として使われ、長岡石の石垣と合わさった景観が新在する。

以降より西側は、環状線の道路工事の影響でかつての風景はほとんど残っておらず、現状は空地が広がっている。街道沿いに散見される土塁も比較的新しく大谷石であるものも多い。

続いて山沿いや参道を調査すると、範囲内には合計で5か所ほど長岡石の石切り場跡が確認できた。石切場が斜面を露天掘りしたものと、横穴が彫られたものの二種類があり、両方ともつるはしによる手掘りで掘られたことが岩肌から確認できる。このうち横穴はヒアリングによると隊道として使われ、他の隊道と地中でつながっている。また山道の切り返し部分や突き当りには石製の祠が置かれ、目印となっていた。

以上のように長岡街道沿い及び山側には、長岡石を用いた建築は少ないものの、石切場や隊道といった遺構、山道、土塁、石垣、石塀などが連続することで連続した石の町並みを形成していることが分かった。

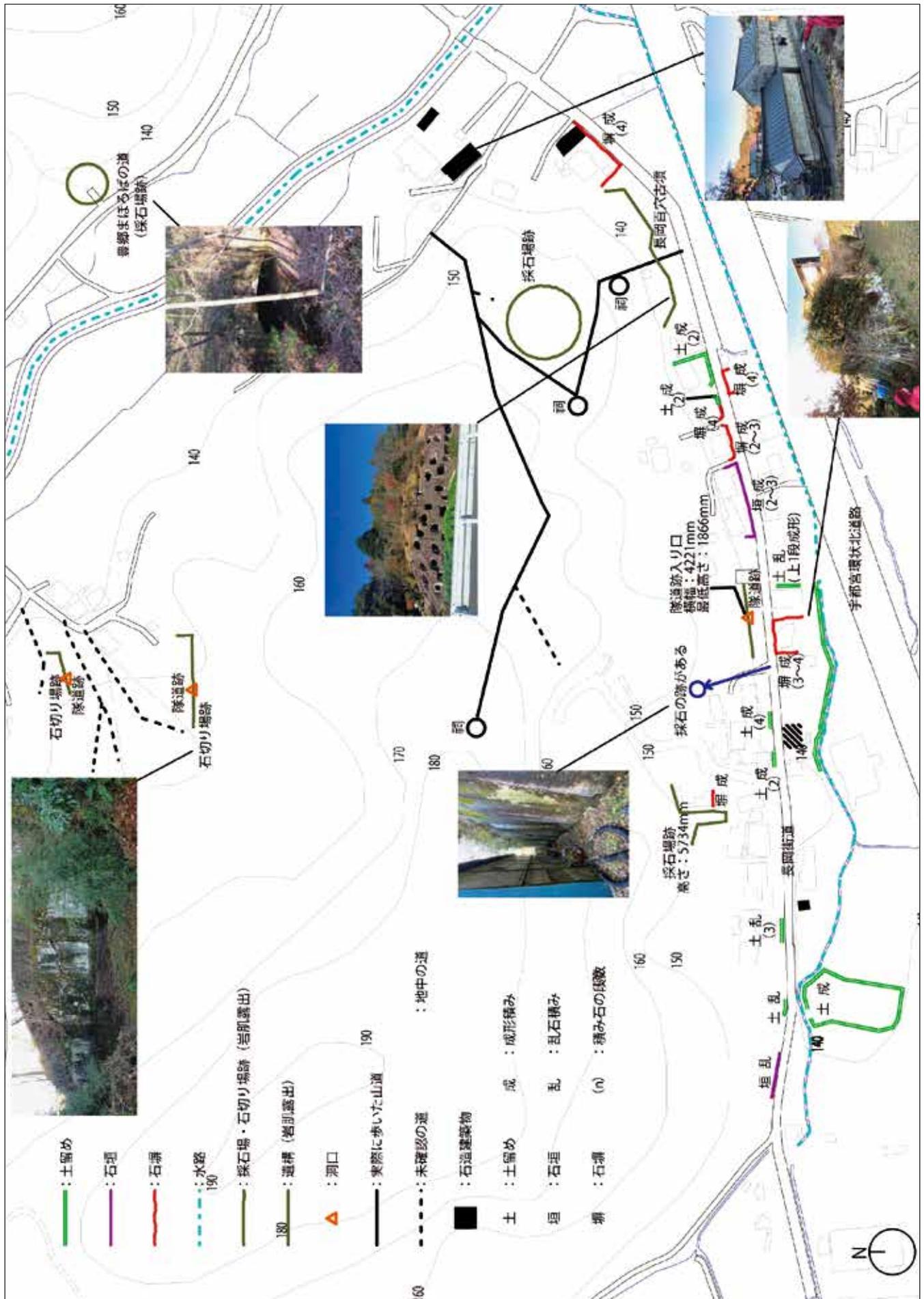


図1 対象範囲の長岡石による採石関連遺構と構造物

4. 長岡地区でつかわれた採石関連の道具

長岡地区において使用されており、現在上河内民俗資料館に寄贈されたつるはしやハンマーといった採石関連の道具について、ヒアリング及び写真による記録に加え、持ち手とつるの部分の実測を行った。

実測した道具は12つで、様々な種類のつるはし、ハンマー、くさびの他、ジョレン（一般に土砂やごみなどをかき寄せるために使われる道具）であった。いずれも金属部分に錆や劣化がみられるものの、保存状態が良く、当時の石工による採石の様子を想起させる。道具はすべてハンドツールであり、大谷などでよくみられるチェーンソーやダイヤモンドカッター等の機械は見られず、これは長岡石の採石が手掘りの時代でほとんど終了したことが要因であると考えられる。

5. おわりに

本稿では長岡石および産出地である宇都宮市長岡地区に対する採石関連の遺構や構築物等の調査の報告をおこなった。調査は本研究室学生が研究として行っており、本稿で記述した内容は途中段階である。こうした調査を通じ、地区の地域的性質や石造文化への理解が深まると同時に、研究を進める学生にとっても地域とのつながりや学習の場として機能する有益なものであったと感じる。

今後は本内容をより精査してまとめると同時に、建築物や竈などの生活用品についても分析を展開していきたい。

注1) ヒアリングは、筆者と徳次郎石研究会会員の中川氏により、地区在住の石渡氏に対して現地案内を兼ねて行われた。なお、ヒアリングでは長岡地区の概要についても聴き、(参考文献1)と併せて記述している。

参考文献

- 1) 「徳次郎石研究活動成果報告集 2020 (令和2) 年度 (豊里地区長岡石の調査ノート)」
北條園子 担当執筆 2020年
- 2) 「徳次郎石研究活動成果報告集 2021 (令和3) 年度 (石のまち) 長岡地区と長岡石による建造物・生活用品について」 小林基澄 担当執筆 2021年
- 3) 「長岡石の概要と生活用品などの用途 栃木県を中心とする多様な軟石の建造物に関する研究 (1)」
小林基澄 安高尚毅 安森亮雄 著 2022年 日本建築学会大会梗概集

名称	長さ (mm)	名称	長さ (mm)
持ち手 つる 	770 330	仕上げつる 持ち手 つる 	360 200
ハンマー 持ち手 つる 	800 170	刃つる-1 持ち手 つる 	690 350
ヤジメ-1 持ち手 つる 	680 390	刃つる-2 持ち手 つる 	550 330
ヤジメ-2 持ち手 つる 	770 400	片ばつる 持ち手 つる 	600 440
ヤジメ-3 持ち手 つる 	550 350	ジョレン 持ち手 ヨコ タテ 	590 230 170
ヤジメ-4 持ち手 つる 	700 260	クサビ 全長 	130

図2 長岡地区でつかわれた採石関連の道具（上河内民俗資料館所蔵）